

水と地域と農の連携

駒村正治 編著

東京農業大学出版会 初版 2007年1月10日発行

A5版 171頁 ISBN 978-4-88694-114-5 1,900円

地球表面には、約 $1,358 \times 10^6 \text{ km}^3$ の水が分布していると考えられている。その約 99% が海洋と水であり、残りは 750~4,000 m 深範囲の深層地下水 (0.4%), 750 m 以下の浅層地下水 (0.3%), 湖沼 (0.009%) およびそれ以外に含まれている (国立環境研究所, 2007)。土壌物理学分野の我々が注目したい水、つまり「土壌水分 (0.005%)、大気中 (0.001%)、河川 (0.0001%)、生物圏 (0.00004%)」は、量的にみれば「それ以外」の範疇になる。たとえていうなら、焼け石に水滴が垂れたら瞬間的に蒸発してしまうようなレベルである。

土壌物理学学会では、「関連学問との緊密な共通理解、共通認識を生み出すための指針」を求めている (宮崎 毅: 新編土壌物理用語事典序文, 2002)、土壌物理学が農業現場で期待されていることの重大性を強く認識している。本書は、そうした学問分野の要請に、柔らかな姿勢で応えているといえる。

本書は、地球規模からみれば“焼け石にシュン”に目を凝らし、「農村を支えてきたのは水であり、水の利用から多様な地域と農の風景が創出された」と掲げ、生きるものがいて農の風景を形作っている、水と土の現場へ読者を一気に誘い込む迫力を醸し出している。

第1章に「メダカ」が登場する。メダカは、日本国中および周辺地域に分布しえる水生動物であり、繁殖にあたっては日照時間、最低水温が関与し、数千の呼び名があるのに加えて遺伝子型も多様で地域性や環境に敏感な魚である。春夏秋冬を映し出す「小川」「水田」「用水路」が彼らの住みかの代表名詞だが、水流・水質・水温などに対しては好き嫌いが激しく、1年を通じて変わる生活環境は周辺環境に連動して様々である。この章を読み進めていくうちに、自然 vs 人間の共生の良好な関係、あるいはイケナイ関係を察知することのできる指標、すなわち“バイオセンサー”にメダカはなっていることに気づかされる。

第2章と第3章では、「堰」と「クリーク」を目玉にした、水資源・土資源・農の第一線現場が紹介されてい

る。水と土をめぐる「争い、協調、協働、共生、共有」の繰り返して、我が国の農村空間が築かれてきたことの、微にいり細にいりが論じられている。

第4章では、畑地帯の農の原風景が、「灌漑」という人為によって形作られた背景とともに論じられている。

第5章は、関東地方の田園風景の基盤となる関東ローム層を、編年学的視点で論じている。

また、本書の末尾には、本書で書かれた主要な用語 32 項目の解説が小事典のようにして掲載されている。

数学・物理系の思考過程だけでは問題解決に苦しむような状態が続いている時に、本書を読めば、まったく異なる次元の斬新なヒントを与えてくれるだろう。

目次構成

まえがき

第1章 メダカにやさしい水田と水のネットワーク

第2章 名水・雄川堰の水環境再生と地域づくり

第3章 循環型農業を有するクリーク地域の水・泥土文化

第4章 水がつくる畑地帯の開発

第5章 利根川沖積低地の水と土のかかわり

あとがき

用語の解説

索引

著者

高橋由季, 高橋一公, 中村好男, 増野途斗, 細野 衛, 駒村正治 (編著者)

<http://www.nodai.ac.jp/>

e-mail: shuppan@nodai.ac.jp

成岡 市 (三重大学大学院生物資源学研究所)

受稿年月日: 2007年2月21日

受理年月日: 2007年2月23日